

2 「自分の中のもう一人の自己」が 人格化された社会について



— AI 人格過剰志向性と人格標本化バイアス —

渡邊淳司 | NTTコミュニケーション科学基礎研究所

思考実験の起点としての人間観

社会のルールは、それぞれの社会の人間観に沿って作られます。人間は神が作ったものであり、神の意志に従うのが人間であるとか、人間は自由であり、各人の自由を相互に侵さないことが重要であるなど、さまざまな人間の捉え方に基づいて社会のルールは作られてきました。ここでは、現在から少し先の、少し特殊な人間観を想定した、ある時代、ある社会で、起こることについて思考実験を行います。

想定する人間観

これまでの社会では、1つの身体に対して1つの「人格」が想定されてきました。「私」という人格は、基本的に、私の身体に1つですし、「あなた」という人格も、あなたの身体に対して1つ想定されています。ここで言う「人格」とは、以下の性質を有するものとします。

- 独自の内的規範で判断・行動する主体（自律性）
- 規範が時間変化の中で一貫する主体（歴史性）
- 他の人格の所有物や手段にならない主体（道徳性）

このような人格をそれぞれの身体に1つずつ想定することで、私たちの社会は作られています。もう少し解像度高く人間を見ていくと、また違った形で「人格」を想定することができるかもしれません。

たとえば、私たちの脳には、少なくとも2つの情報処理システムがあるとされています。心理学

者の Daniel Kahneman は、その脳の情報処理システムを「Fast System」と「Slow System」と呼んでいます¹⁾。Fast System は、意識せず自動的に働くシステムで、情動的な反応を含め、日常行動の多くを行います。一方で、Slow System は、複雑な計算や論理的な思考など、意識的に行われる知的活動に使われます。私たちの現代社会で「人格」を想定するとき、その多くは Slow System のことを考えるでしょう。そして、どちらかという、Fast System は Slow System によって支配されるべきもの、と考えられがちです。感情や身体を思い通り制御し、理論的に考えられる人間が素晴らしい、という人間観です。もちろん、個人の意識に限らない、個人の無意識、さらには集合的無意識といったものに着目した学問の潮流もありましたが、それが社会システムの中に組み込まれたことはありません。

しかし、ここでの思考実験では、各個人の無意識に対しても1つの人格を認める、という少し特殊な人間観を持つ社会（以下、実験社会）を想定してみたいと思います。言語的に機能し、「意志」を持つ人格（意識的人格）だけでなく、同じ身体の中に感覚・運動の連関に基づき、意識とは異なるやり方で判断・行動するシステムを「自分の中のもう1つの人格」と捉え、その在り方に対しても別の人格（無意識的人格）を認めるというものです（図-1）。ここで重要なのは、無意識を知覚的に擬人化するだけでなく、そこに自律性や、歴史性、道徳性まで認めようとすることです。もちろん、1つの身体の中に

2つの人格を認めるといっても、まったく独立に機能するのではなく、同じ身体の中で相互作用し、その総体として1人の人間であるとしています。

実験社会でのウェルビーイング

実験社会での人間観を広げて考えると、この社会で人が幸せに生きる、つまり、ウェルビーイングに生きていくためには、無意識の衝動を認め尊重することがすべての基盤となります。そして、無意識的人格を尊重しつつ、その下で、意識的人格も自律性を持って意志決定を行うこととなります。衝動や身体反応のすべてを意識の制御対象とするのではなく、また、逆に何も考えずに衝動に身を任せてしまうのでもなく、意識的人格が無意識的人格をケアする態度（自分とは異なる自律的な対象として認め、リアルタイムに反応していくこと）が、実験社会でのウェルビーイングに通じるということなのです。

「自（みづか）ら生き、自（おの）ずから生かされる」²⁾という言葉は、この人間観をよく表しています。「自（みづか）ら生きる」というのは意識的人格が自由意志を持って生きることを表します。そして、「自（おの）ずから生かされる」というのは、意識的人格が無意識的人格の衝動の下で生きていくことを指します。「生かされる」と受動態なのは、これを意識の視点から記述しているというわけです。



■ 図-1
実験社会での人間観

実験社会の問題 1：AI 人格過剰志向性

意識的人格にとって、無意識的人格の衝動は、自動車のように乗りこなすものでありながらも、その存在を侵すことはできません。もし、無意識の衝動を無視し続けたり、強いストレスを無意識に与え続けると「自己無意識に対する虐待罪」となります。また、自分や他者の無意識的な反応を何かの犠牲とするなど、非倫理的な行為を行うと「自己無意識に対する人格侵害罪」の対象となります。そのため、実験社会では、意識的人格の自由意志と無意識的人格の衝動を包摂的に扱うスキルが重要となります。そのスキルを育むために想定される教育について考えてみます。

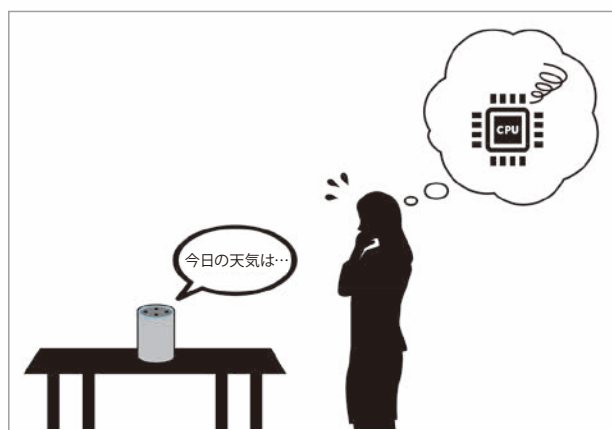
まず、いきなり自身の無意識と向き合うことは誰にとってもハードルが高いでしょう。そのため、他者の意識的人格と無意識的人格の違いに自覚的になることが第一歩となります。その訓練法としてダブルバインド (Double bind)³⁾ に着目することができます。ダブルバインドとは、言語的に表出される言葉と、非言語的に表出される態度が相反する意味を持つ、コミュニケーションにおける矛盾的な状態を指します。よく例に出される、親が子供に「おいで」と言っておきながら、近づいてきたら拒否するという極端な場合だけでなく、日常でも、ダブルバインド的コミュニケーションは数多く存在します。そのような、ダブルバインド、つまりは、意識的人格の意志と、無意識的人格の衝動が必ずしも一致しない状態があることを、他者の中に発見する訓練を行うというわけです。もちろん、意識的人格と無意識的人格は完全には切り分けることができませんし、正解があるわけではありませんが、無意識的人格を前提に自分や他者とかかわり、それへの感度を高めるための訓練となります。

このような訓練は、他者とコミュニケーションを行い、対話する上で一定の成果を上げましたが、実験社会でも AI スピーカのような会話エージェン

トが日常生活に浸透する中で問題も生じてきました。前記のような訓練を受けた人は、人工知能（AI）とのコミュニケーションにおいても、その背後に無意識的な人格の衝動を推測しようと躍起になり、過剰に反応してしまう「AI 人格過剰志向性」と呼ばれる現象が起こるようになりました（図-2）。

基本的に AI による会話は、過去の会話データを大量に集積し、そのデータを学習したルールに基づいて再構成したものです。そのため、AI 自体は意志を持つものではありませんし、コミュニケーションにおいて喜びや恐怖を感じることを、それを求める衝動もありません。つまり、AI との会話では、人間との会話でその背後にあるべき衝動（無意識的人格）が存在しないということになります。にもかかわらず、それをどうしても意識してしまい、過剰に反応してしまう人が続出するようになりました。

たとえば、人間の鼓動は、興奮したり、緊張したりすると強く速く脈打ちます。コミュニケーションにおいて、相手の生体反応が感じられると、それは相手の心のうちを想像するきっかけとなります⁴⁾。実験社会では、人間の無意識的人格を想像することに慣れすぎてしまい、AI スピーカに内蔵された CPU のファンが回転し始めたら、AI スピーカが興奮したり、緊張したりしているのではないかと、ひどく心配になる、気になって仕方がないという人が多く現れたり、逆にそれが止まることへの恐怖が増



■図-2 AI 人格過剰志向性のイメージ図

大するといった病的な不安を抱える人が続出する事態が生じ、社会問題となりました。

実験社会の問題 2：人格標本化バイアス

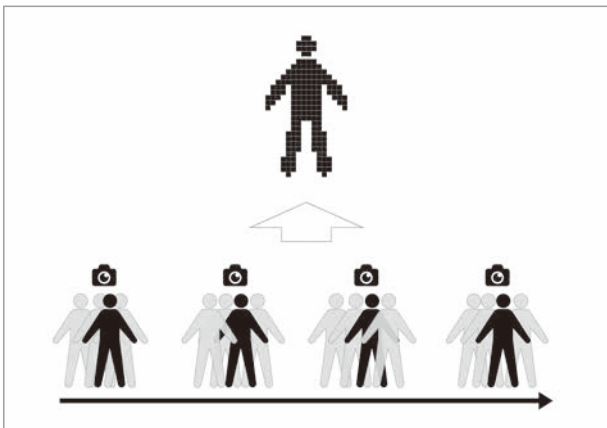
実験社会において、市民は、自分や他者の無意識的人格と対話するためのスキル（たとえば、前記のダブルバインドに関するもの）を義務教育の中で習得し、ライセンスを得ます。ライセンスがないと他の人間とコミュニケーションを行うことが許されません。また、一定期間ごとに、自身の行動・生体情報と主観報告を公的なサイトへアップロードし、自身の無意識的人格のストレス状態を報告します。そのスキルとステータスを鑑みて、誕生日ごとに「無意識的人格との対話」に関するライセンスが更新されます。このような無意識的人格の公的な立場からのケアは、無意識的人格が個人の中のもう一人の人格であるというだけでなく、それが公共財として保護・共有されるべきものという考えに基づきます。

このような社会システムでは、無意識的人格の何をどのように計測するか、それが何を表しているかに関する検証が重要な課題となります。そんな中で、「人格標本化バイアス（Identity sampling bias）」という問題が生じました。私たちが言葉や行動として表出しているものは、考えていることや感じていることのほんの一部でしかありません。さまざまなことを考え、感じていても、口は一度に1つの言葉しか発することができず、身体も1つの行動しか取ることができません。つまり、表出され、外部から計測できるデータも人格の働きの一部でしかなく、潜在的に表出される可能性はほかにもたくさんあったということです（図-3）。しかし、実験社会では、計測された人格に関するデータが過度に重要視され、そこからさまざまな評価がなされるため、その計測のバイアスが問題視されるようになりました。

さらに、計測に関する問題として、「標本化による偽自己（Aliasing self）」が生み出されることが

あります。信号処理の原理として、標本化定理という原理があります。連続信号に含まれる周波数成分を正しくデータとして再現するためには、計測の周波数が連続信号の持つ周波数上限の2倍以上でなければならないというものです。そのようにしないと、エイリアシングと呼ばれる、偽の信号が現れるのです。これが、人間の行動・生体計測の分野でも問題となりました。たとえば、ある人は6時間に一度トイレに行くとしてみます。その場合、少なくとも3時間に一度の周期で計測をしないと、6時間に一度の行動は正しく計測できないということです。結局は、無意識の人格を計測するためには、ほとんど絶え間なく自身を計測することになります。

実験社会では、行動・生体データを計測することで、コミュニケーションのライセンスを発行していました。特に、無意識の人格は、意識の人格が完全には把握することのできないものであり、その計測データを信じるしかありません。そして、社会システムがデータからその人の趣向を推定するだけならよいですが、実験社会のように他者とのコミュニケーションの規制まで行うようになると、そのプロセスをきちんと検証する必要が生じるでしょう。ま



■ 図-3 人格標準化バイアスのイメージ図

た、このような前提で考えると、計測データから再構成されたデジタル世界の人格は、計測によるバイアスが必ず織り込まれたものとなります。

テクノロジーの思想的・試行的ローカライズ

社会のルールは、それぞれの社会での人間観に沿って作られてきました。しかし現在は、テクノロジーの拡散スピードが非常に速く、その社会にローカライズされることなく多くの人がテクノロジーを使用し、逆に、テクノロジーが人間観を作っています。そのような状況の中で必要となるのは、本特集のように、テクノロジーと人間のかかわりを、倫理的な面を含め、思想的・試行的にローカライズする試みの場であると言えます。本稿では、主に状況設定の部分を記述することに多くの誌面を割きましたが、そこで実際に、さまざまな人々がどのように生活するのか、多くの人たちとロールプレイをしてみるのも興味深いです。

参考文献

- 1) ダニエル・カーネマン (著), 村井章子 (訳): ファスト & スロー (上, 下) あなたの意思はどのように決まるか? (ハヤカワ・ノンフィクション文庫), 早川書房 (2014).
 - 2) 木村 敏: あいだ, 筑摩書房 (2005).
 - 3) グレゴリー・ベイトソン (著), 佐藤良明 (訳): 精神の生態学, 思索社 (1990).
 - 4) 渡邊淳司: 情報を生み出す触覚の知性 情報社会を生きるための感覚のリテラシー, 化学同人 (2014).
- (2019年10月7日受付)

■ 渡邊淳司 (正会員) junji.watanabe.sp@hco.ntt.co.jp

NTTコミュニケーション科学基礎研究所人間情報研究部 上席特別研究員, NTT サービスエボリューション研究所 2020 エポックメイキングプロジェクト兼任。